

《書評》

『近代日本の身体統制：宝塚歌劇・東宝レビュー・ヌード』

垣沼絢子* 著、人文書院、2024 年

須川 渡†

本書は、戦前から戦後にかけての宝塚少女歌劇や東宝のレビュー史を対象に、「近代化」と「身体統制」という二つの軸から、日本におけるレビュー文化の形成と変容を読み解こうとする研究である。

19 世紀末にパリのミュージックホールで誕生し、資本主義に後押しされて世界各地で流行したレビューは、日本では 1927 年の宝塚少女歌劇団『モン・パリ』の上演を契機として急速に広まった。本書が問いとして掲げるのは、この西洋由来のジャンルであるレビューが日本でどのように受容・展開されていったのか、そして舞台上の女性の身体を規定する当時の日本社会の「身体統制のイデオロギー」とはいかなるものであったのか、という点である。

本来、ラインダンスなどにみられる無個性の大人数による一糸乱れぬ集団舞踊は、最先端の機械技術の使用や西洋近代社会、とりわけ民主主義国家の象徴とみなされていた。しかし体格や身体感覚の異なる日本において、西洋舞踊を踊る女性たちの身体には、西洋民主主義、大東亜共栄圏思想、敗戦後の占領政策、戦後復興、さらには「日本人」という民族性など、その時代ごとの複雑な国家的・社会的イデオロギーが付与され、つねに政治的な眼差しの対象となってきた。

本書は、日本固有のレビューの展開をたどりながら、日本人がいかに自らの身体や身体感覚を「近代化」しようと試みたのか、そして女性の身体表現が時代ごとにどのように統制され、読み替えられてきたのかを明らかにしている。

本書は、以下の通り全体で 6 章から構成される。

第一章 レビューの女性を取り巻く議論：近代性と身体統制はこれまでどう語られてきたか

第二章 演劇環境の近代化：一九二〇年代宝塚少女歌劇とレビュー

第三章 身体感覚の近代化：一九三〇年代レビューと国家表象

第四章 初期ヌードレビューの女性の身体：占領期（一九四五～一九五二）の演劇検閲

第五章「真のレビュー」としての日劇ミュージックホール

第六章 ヌードレビュー劇場と武智鉄二の交錯：一九五〇年代東宝と伝統芸能

第一章では、レビューをめぐる先行研究を概観し、「近代化」と「身体統制」という言説の整理が

* 立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員

† 立命館大学文学部 准教授

sugawa@fc.ritsumei.ac.jp

行われる。ラインダンスなどのプレジジョン・ダンスといった集団舞踊が、近代資本主義や機械社会の到来を象徴するものとして評価されてきた一方で、日本のレヴューでは体格の差異などから西洋舞踊の模倣に限界があった。そのなかで女性の身体表現がいかに統制され、どのように理解されてきたのかを問い直す視座が提示されている。

第二章では、日本におけるレヴュー流行の契機となった1927年の宝塚少女歌劇団『モン・パリ』に焦点が当てられる。演出家・岸田辰弥が舞台技術や演者の訓練を通じて演劇環境の近代化を試みた過程、さらに主題歌を観客と共に歌わせることで観客の身体感覚をも近代化しようとした演出の意図が分析される。

第三章では、1930年代の宝塚におけるレヴュー論争や海外公演を手がかりに、演出家・宇津秀男らによるレヴューの「再近代化」の試みが検討される。同時に、戦時下においてレヴューが日独伊の親善や大東亜共栄圏を称える軍事プロパガンダとして機能していくなかで、西洋化された身体表現と国家イデオロギーのあいだに生じたねじれが浮かび上がる。

第四章では、占領期における「ヌードレヴュー」と「ストリップ」が扱われる。秦豊吉が健康的なヌードを敗戦からの復興と西洋化の象徴として芸術的に正当化しようとした言説や、岡田恵吉が「バーレスク」という形式を導入した過程が紹介される。さらにGHQ/SCAPの機密文書をもとに、進駐軍兵士の風紀維持の観点から独自の演劇検閲が実施されていた実態が明らかにされる。

第五章では、占領期終了後に誕生した日劇ミュージックホール(NMH)を対象とする。宇津、岡田、丸尾長顕ら戦前からの演出家たちが、当時氾濫していたストリップとの差別化を図るためにフランスのミュージックホールを参照し、「真のレヴュー」としてのブランドを構築していく言説上の戦略が分析されている。

第六章では、1950年代後半に前衛演出家・武智鉄二が行った「ヌード能」が取り上げられる。西洋的身体美の模倣から離れ、日本の伝統芸能とヌードを組み合わせることで「日本人という民族固有の身体」を再発見しようとした思想的転換として、この試みが位置づけられる。

評者の立場から、本書の意義を3点に整理しておきたい。

第一に、「貫戦期(transwar)」という視座の導入(14頁)である。これは歴史学者アンドルー・ゴードンが提唱した概念であり、1930年代から1950年代にかけての戦前・戦後を断絶ではなく連続した過程として捉える考え方である。この視点によって、戦後のヌードレヴューは突如出現した風俗現象ではなく、戦前の宝塚レヴューにおける西洋近代化の欲望の延長線上に位置づけられることが明確になる。

第二に、広範な資料収集に基づく演劇史の再構築である。著者自身が述べるように、写真やプログラムなどの一次資料が精力的に収集されており(38頁)、とりわけ『モン・パリ』の分析では具体的な場面構成や舞台機構、ラインダンスのディスクリプションを通じて、演出家たちがいかに演劇環境の近代化を試みたのかが精緻に読み解かれている。

第三に、作品分析にとどまらず、その社会的コンテクストに深く踏み込んでいる点である。例えば第五章では、日劇ミュージックホールの観客の30～50%が在日米兵であった事実を指摘し(268頁)、言葉の通じない彼らに向けて視覚的な喜劇やヌードが強調されていた背景を描き出している。また第四章では、GHQ/SCAPによる演劇検閲の実態が取り上げられ、政治的権力が舞台上の身体にどのように介入していたのかが明らかにされる。

このGHQ/SCAPの検閲資料については、評者自身も国立国会図書館日本占領関係資料を中心に調査を続けている。その多くは、ラベリングはされているものの、その内実は必ずしもラベルからは見通せず、一件ずつ確認していくほかない雑多な機密文書の集合体であり、演劇検閲の全体像はいまだ十分に整理されているとはいいいがたい。その意味で、本書が会議録や検閲台本の書き込みを丹念に読み解き、GHQ/SCAPが進駐軍関係者の性風紀秩序を乱すことを恐れてヌードを規制していた実態を明らかにした意義は大きく、今後の演劇検閲研究の重要な端緒となる成果といえる。

この点に関連して、評者自身のこれまでの第三地区（GHQの民間検閲局における「CCD III：九州・四国地区」）における調査結果も踏まえて、若干の補足を加えておきたい。本書では、早稲田大学演劇博物館に所蔵されるダイザーコレクション検閲台本から、福岡県戸畑市の宝塚国際少女歌劇団による1948年の上演作品『スウィングオリンピア』の検閲台本が分析されている（218-219頁）。この作品には、満洲国の民族政策の標語である「五族協和」を賛美する「五色にはえる歌」という戦中の語句がそのまま用いられていたが、著者が指摘するように、それはオリンピックの「五輪」と読み替えられることで検閲を通過していた。

評者が第三地区の検閲台本を調査してきた感触からいえば、たとえ戦中のイデオロギーを含む表現であっても、台本上に明確に「五族協和」と記されていない限り、検閲の対象とはなにくかったと考えられる。実際、台本上に明示された「支那」や「大東亜」といった戦中と強く結びつく語彙、あるいは「切腹」「心中」のような封建的価値観を示す言葉、占領軍やマッカーサーに対する態度の描写などには、厳しく赤字修正が加えられる傾向があった。すなわち、表層的なテキストとして明示されていない隠喩や読み替えに対しては、必ずしも規制が及ばなかった。

著者は『スウィングオリンピア』の検閲通過の背景として、九州における検閲官の裁量の大きさや、東京で流行した元ネタを知らないという情報格差の可能性を指摘している。しかし、こうしたテキスト偏重の検閲が第三地区特有の傾向であったのか、それとも検閲官個々の判断に依存する属人的なものだったのかは、なお慎重に検討する必要があるだろう。アメリカ側の統一的なコードと現場の裁量がどのように交錯していたのか、第三地区とそれ以外の各地区の地域差を比較する研究は、今後の演劇検閲研究にとって重要な課題となるはずである。

加えて、評者が調査したGHQの出版・映画・演劇・放送部門（PPB）の記録の中にも、本書の議論を補強する興味深い資料が見いだされる。1947年9月、熊本における新劇の劇団「文芸座」による霜川遠志作『傷つける舞台』という脚本が記録されている。この脚本は、ダイザーコレクションとしても閲覧することができ、当時東京で氾濫していた俗悪なエロショーに対する地方からの危機感を示すと同時に、「私たちは芸者や娼婦よりも下の階級に分類されるべきなのか」「ダンサーが芸術家になろうとする試みを阻む理由が何かあるのか」といった踊り子たちの切実な声が代弁されている。

本書は、当時のメディアが踊り子を街娼（パンパン）と同類として恣意的に消費していたこと（171-172頁）や、1952年に日劇ミュージックホールのストリップパーたちが出した「ストリップ廃業宣言」が興行側の戦略であった側面（241-244頁）を指摘しているが、この5年前のアマチュア脚本の存在は、「単なる見世物ではなく芸術家として認められたい」という踊り子たちの希求、あるいはそうであってほしいという社会的想像力が、確かに存在していたことを示している。GHQがこうした地方の声を記録していた事実は、単なる上からの検閲にとどまらず、社会内部の動向を注意深く観察していた可能性を示唆している。前述の地域差の問題ともあわせて、こうした資料は今後の研究をさらに豊かにする手がかりとなるだろう。

第六章で扱われる武智鉄二の「ヌード能」への言及も興味深い。一般にはスキャンダラスでキワモノ的な試みとして語られることの多い「ヌード能」を、著者はそれまで西洋化を前提としてきたヌードレビュー劇場において、日本独自の身体や身体所作を再発見しようとした試みとして位置づけている。西洋的価値観からの脱却と「民族の身体」の再発見という思想的転換として捉え直すことで、この実践を戦前から続く身体統制の歴史のなかに位置づけている点は示唆的である。

本書でも指摘されているように、近年は女性によるヌード舞踊であるストリップティーズやバーレスクに対して、女性労働や文化人類学的観点から関心が高まりつつある（21頁）。本書は、日本のレビューおよびそこから派生した初期ヌードレビューの歴史的経緯とイデオロギーを実証的に明らかにしており、これらの研究領域にとって重要な理論的基盤を提供する一冊といえる。

最後に、評者個人の回想を少し書き添えて本稿を結びたい。著者は評者が大阪大学在学中に学びを共にした学友であり、当時から膨大な一次資料を駆使した演習発表を数多く行っていた。その頃は、あまりの資料の多さと議論の広がり、一体どこに着地するのか分からず、聞いている側も一緒に迷子になってしまうことが少なくなかった。しかし、あの時の果敢な試行錯誤が、このような一冊の成果として結実したことは、我がことのように喜ばしい。

本書を通読して驚かされるのは、当時の「迷子になりそうなほどの広範な資料収集」が、「貫戦期」や「身体統制」「近代化」という大きな枠組みのもとで一つの歴史像として統合されている点である。そこから浮かび上がるのは、舞台演出の変遷だけではない。日本人の非西洋的な身体のあり方、舞台上の女性に向けられるジェンダーの眼差し、国家や占領軍による検閲の実態、さらには権威化された伝統芸能の再解釈など、多様な問題が交差する広大な研究領域である。本書は、これらの分野を横断し、新たな議論を喚起するための重要な基盤となる一冊である。

なお本書は、2025年6月に日本演劇学会第57回河竹賞奨励賞、同年12月に現代風俗研究会橋本峰雄賞を受賞している。